

エルサルバドル体験記「Siempre hay solución（大丈夫！なんとかなるでしょ!）」

市川 彰

私が、エルサルバドルを最初に訪れたのは 2003 年。サンタ・アナ県チャルチュアパ市でおこなわれていた名古屋大学の考古学調査に参加するためである。その後、青年海外協力隊として 2005 年から 2007 年、2009 年にエルサルバドルに派遣された。託された任務は、チャルチュアパにあるカサ・ブランカ遺跡公園とエルサルバドル工科大学において、エルサルバドルでの考古学調査を通じて文化財保護を担う人材の育成である。協力隊終了後は、考古学者になるべく日本で大学院に進学したこともあって、エルサルバドルには毎年のように調査に訪れている。

慣れない土地や文化、異なる常識や価値観をもつ人々のなかに入り込んでみると、自分たちが常識だと思っていることや当然だと思っていることが通用しないことが多々ある。そのように頭ではわかっている、石頭の私は、ついつい「日本では・・・」と考えたり、イライラしたり、悩んだりする。

こうした問題や悩みに直面したときに、仲間のエルサルバドル人に聞くと、答えは簡単、

「Siempre hay solución！（大丈夫！なんとかなるでしょ!）」

だ。一見てきとうな返答だが、自信に満ち溢れたこの言葉はマジックのように、私をどこかで安心させてくれる・・・というふうに私はとらえることにしている(笑)。



レンパ川にかかる橋で立ち往生した車を直す仕事仲間。



作業員さんとのアドベの製作ではたくさんのことを学び、それらを論文として世に出すことができた。

石頭の私は、「じゃあどうしたらいいのさ、具体的に教えてくれないか」と聞き返すと、「なるほど、そうくるか」「いや、そりゃないだろ」と、私の創造力や経験では到底及ばない返答が返ってくる。問題・課題に対する解決策を示されると、その根拠・背景・方法を探りたくなるのが研究者の性である。しかし、そのような根拠・背景・方法について突っ込んで聞いてみたとしても、それらが論理的に示されることは、なかったりする。そして、

「No te preocupes, siempre hay solución !」

となる。これは裏を返せば、とにかく考えて、口にして、やってみることが大事ということであり、課題や問題の解決に向けて手を変え、品を変えトライすることが重要なのだ。その創造力、実行力、適応力には、日本でぬるま湯につかっている自分には見習うべきことが多い。発掘現場ではすぐに機械や市販品に頼りたくなる私だが、たいていのことは身の回りのものに人力を加えればなんでもできてしまう。目の前の問題や課題に対して応用力・即興力のない私にとって、解決策を瞬時に考え、それを実現するためになんでもできてしまう、否、なんでもトライするサルバドル人の生き方には真に感心させられる。ただし、感心するだけ、なかなかそれを自分が実現しようと思っても難しいのだが・・・。

創造力と実行力が問われる学術の世界に身を置いている研究者は、確かに科学的な知識が豊富だ。しかし、あれもだめ、これもだめ、それもだめと、サルバドル人なら試してみないとわからないではないか、というひらめきや提案には見向きもしない。自戒を込めて言うならば、常識や先例、周囲の目を気にして、妥当な落としどころに向かう研究が多いように思われる。確かに日々の小さな積み重ねが科学的知見となる。その点、失敗を恐れず、創造力と実行力を兼ね備えたエルサルバドルの考古学仲間や作業員さんには毎度驚かされるのである。このような気づきは、異文化のなかで生活してみてもわかることでもある。



突然 T シャツを貸してくれというので、貸したら、それでハチの巣をとってくれた。

現在、私はアメリカに住んでいる。アメリカの建設業や農業は、エルサルバドルを含む中南米出身の労働者たちで支えられている部分がある。国際的かつ複雑な社会構造や政治の問題がその背景にはあり、賛否があることは言うまでもない。ただ、彼ら/彼女らは、いつも陽気だ。私は、時々、近所の建設現場のおじさん、最寄のププサ屋のおばちゃんやお客さんと与太話をすることがある。このコロナ禍や大統領選をひかえ、色々と心配事も多いと想像するが、

「Cachinbón! siempre hay solución! pue!」

そうか、おじさんは、サルバドル人かい。

何かと暗い話ばかりが先行する世知辛い世の中ではあるが、サルバドル人の「siempre hay solución」精神にならって、前進しようが後進しようが、動き続けることが、今は大事なのではないかと、自分に言い聞かせて、今日という日を生きている。

市川 彰（いちかわ あきら）氏

2005～2007年にチャルチュアパにあるカサ・ブランカ遺跡公園、2009年にはエルサルバドル工科大学で考古学隊員として活動。隊員活動終了後は、日本で大学院に進学し、現在はアメリカで研究員をしている。著書に隊員時代に担当した発掘調査データに基づいて執筆した『古代メソアメリカ周縁史』（溪水社、2017年）がある。